



「愛をあなたに」 後藤絢音（本学文学部学生／写真部）

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼び起こすとされた橋の花の香り。
その橋を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.45 2021.10

- C 〈巻頭エッセイ〉
- O 異文化コミュニケーション論とジェンダー
- N イギリス女性生活誌 45
- T 近代日本音楽史を彩る女性たち 6
- E 物語の女性 6
- N 日本の伝統技術を守る 女性の進出 4
- T 女性とスポーツ ―多くのハードルを越えて―
- S INFORMATION

異文化コミュニケーション論とジェンダー

北林 利治

本学国際英語学部国際英語学科教授

国際英語学部の専門科目のうち、異文化コミュニケーション関係の科目を担当している。そのクラスで紹介したある参考書の中に、「異文化コミュニケーション」という項目があった。聞き慣れない用語であるが、たとえば、同じ日本文化の中であつても、同時に存在している独自の考え方や行動様式をもっているグループがある場合、それらのグループのコミュニケーションを指す言葉である。同じように日本で育って、大きくいえば、日本文化の中で過ごしているといえる人々の集団の中にも、育った地域や世代によって、「大阪の文化」とか「学生の文化」とかが存在する。ふつう異文化コミュニケーション論といえば、日本文化と対比的にみて、諸外国の文化におけるコミュニケーションスタイルを研究することが多いが、同じ文化の中の「共文化」も異文化コミュニケーションとして研究しているという考え方である。

こういった考え方に立てば、女性文化もひとつの共文化と扱われ、異文化コミュニケーションとして女性のコミュニケーションスタイルを研究していくということになる。同じ参考書の中で、ひとつのエピソードが紹介されていた。ある大学生の男女がつきあっている。デートでの会話で、ひとつのすれ違いが生じる。女性がいろいろ

な悩みを男性に話しているが、男性は、それには、あまりな返事しかない。そして最後に、その男性はその悩みにひとつのアドバイスがガールフレンドにして、この会話は終わる。この一連のコミュニケーションに、女性のほうは不満をいだいている。この解説として、この女性はとにかく親身になって悩みを聞いてほしかったのに、男性は、アドバイスを与えるという直接の行動で答えることが多いため意識のすれ違いがあつたわけであるが、男性としては、誠意あるコミュニケーションスタイルであつたと書かれている。

またこのクラスで、もうひとつの参考図書として、Fred E. Jandt の *An Introduction to Intercultural Communication* をあげた。第八版まで版を重ね、英米の大学でもよく使われている定評ある異文化コミュニケーションの入門書である。この本にも、*Women and Culture* という章が設けられており、その章の中にある *Gender and Communication* というセクションでは、女性の言語の用い方について解説があり、日本語からの例として、女性語の「うだわ」や男性語の「うだな」などの文の最後に付ける助詞は、意味の違いというよりは、ある種のトーンの違いを聞き手に与えると紹介されてい

る。一般には、男性の用いるコミュニケーションスタイルは「力強さ」や「直接性」と結び付けられるとされ、女性の言語の用い方は、「柔弱さ」「敏感さ」「間接性」を連想させると書かれている。

いま、日本語における女性のコミュニケーションスタイルとして、「間接性」というのを挙げたが、これは、日本語だけに限ったことでもない。アメリカの著名な言語学者、コミュニケーション学者にタネン (Deborah Tannen) という人がいる。異文化コミュニケーション関係の著作が多数あるが、彼女の本の中で論じられているアメリカ夫婦の会話がある。ある夫婦のドライブ中に、妻が夫に「あなたは、のどは渴いていない? ちよつと車を止めて何か飲む? 」と聞く。夫は、自分ののどが渴いていないので、短く *No* と答える。その後、家に帰ってから、妻は、自分ののどが渴いていて、車を止めて何か飲みたかつたのだという。大まかにいえば、女性のコミュニケーションスタイルは「間接性」がキーワードであり、これは、言語が違つても、かなり広く見られるコミュニケーションの現象であるといえる。タネンの一連の研究では、このような女性のコミュニケーションスタイルと男性のそれを、それぞれ、ラポールトーク (rapport-talk)、レポートトーク (report-talk) と名付けられている。女性の言語コミュニケーションでは、間接的に相手との共通点や共感する気持ちを探りながら親近感をもってコミュニケーションを進めていく。一方、男性にとつては、事実や知識の伝達がコミュニケーションの第一義的な目的であり、聞かれた質問には *Yes* か *No* で直接的に答えている。異文化コミュニケーションの観点からいえば、この二つのスタイルは、優劣の関係ではなくコミュニケーションスタイルの違いであり、両

者は互いにその違いをよく理解し、それを認め合うことがよいコミュニケーションの遂行につながるといえる。八木橋は、女性のコミュニケーションスタイルが好ましいものとして、女性医師が患者中心に寄り添つたコミュニケーションを取るスタイルが多いことから、それが医療提供者と患者とのよいコミュニケーションに貢献し、ひいては、患者の治療にもよい影響を与えているという例を紹介していて大変興味深い (八木橋 二〇一八)。

しかし、ここで考えてしまふ。異文化コミュニケーション論では、コミュニケーションにおける実際の言語の使用やそのスタイルは、その文化における文化価値観の反映であると考ええる。そして、もちろん、文化には優劣はなく、それぞれの価値観がもとになって立ち現れるコミュニケーションスタイルも優劣はなく、お互いがそれぞれをよく理解しあうことが大切だ、と授業でもいつも言っている。異文化コミュニケーションを考える場合、もっとも大切なことは、文化に優劣がないということを確認することである。しかし、女性のコミュニケーションスタイルをひとつの共文化としてみなす、異文化コミュニケーションとしてのジェンダーのとらえ方は、どうなるのだろうか。コミュニケーションスタイルの違いを優劣のない違いとしてとらえることは正しいことだろうが、ジェンダーに関係するコミュニケーションスタイルを「異文化」のひとつとして片づけてしまふことは、ジェンダーの違いに内在しているさまざまな社会的問題とその解決から目を逸らしてしまうことになりはしないだろうか。

【参考文献】

八木橋宏男「言語学は女性と男性をどう見てきたか」ダイバーシティ推進に切り込むコミュニケーション論」『杏林医会誌』49巻1号、二〇一八年、43-49頁

45

●連載●イギリス女性生活誌 一九世紀イギリスの レジェンド・ウーマンたち 6 ―クイーンズ・ナース、デイストリクト・ナース―

松浦 京子

本学文学部歴史学科教授



クイーンズ・インスティテュート傘下のリバプール地区看護協会が発行した報告書（1897年ごろ）に掲載された「ヴィクトリア女王によるクイーンズ・ナースへのバッジ授与」を描いた挿絵

出典：Susan Cohen, The District Nurse, Oxford, 2012.

前回紹介したクレイヴン（巡回訪問看護が全国展開を迎えようとした時期の指導者にしてアイコンニックな存在）の理念が反映された「ヴィクトリア女王在位記念看護師インスティテュート（QIと略）」は、女王の在位五〇年を記念して全国の女性から寄せられた基金の活用先として女王自身が選定した結果、一八八九年に発足した巡回訪問看護の全国統括組織である。ロンドンの本部（ホーム）で養成したデイストリクト・ナースを各地の訪問看護組織に派遣して優れた看護を全国的に提供し、また地区看護組織の結成を支援しようとしたのである。このQIで養成されたデイストリクト・ナースは、本部の登録簿に名が記載されたのち、各地の看護協会と雇用契約を結びその地へ赴任する一方で、QIから派遣される査察員の監督と支援を受ける義務と権利を負った。この監督指導のための査察

制度のなかった（登録制度の発足は一九一九年）時期にあつて唯一の資格登録として意味を持ち、それはまた、

員の派遣こそが全国統括組織としてのQIの眼目であり、巡回訪問看護の質の均質化、そして維持・向上が図られたのである。一九世紀半ばの巡回訪問看護組織化の揺籃期には、デイストリクト・ナースの監督は富裕な中流階級女性のヴォランタリ活動の一環であったが、ようやく看護活動そのものの監督指導が専門家によって担われることとなったのである。

登録名簿への名前の記載は、ナースたちにとって、看護師の国家登録

巡回訪問看護の専門家としての技量の保障ばかりでなく、女王からロイヤル・チャーター（勅許）を授けられた組織に属しているという矜持を自他ともに認識させるものであった。それゆえ彼女たちは、「クイーンズ・ナース」と特別に呼ばれたのであり、その証しとしてのバッジを授与されていた。また、QI本部において編集される機関誌『クイーンズ・ナースズ・マガジン』を通じて情報の交換、連帯を深めることもできた。こうしてクイーンズ・ナースは、貧民層の患者に対する奉仕の精神を帯びた看護専門職者として高い水準の看護ケアを提供し、その傍らで教育・教化を行い生活の向上改善を促すという責務を負って全国に広がっていったのである。すなわち、彼女たちは、クレイヴンの、もといナイティンゲールの理想を体現する存在であったのである。



クイーンズ・インスティテュート初代総監督ロザリンド・バジェ、功績により勲爵士位を授与され、デйм（男性のサーに当たる）の称号を付けて示されている。

出典：Mary Stocks, A Hundred Years of District Nursing, London, 1960.



クイーンズ・ナースの証であるバッジ。ヴィクトリア女王を表す文字があしらわれている。左のバッジの写真のように身に着けた。

出典：Mary Stocks, A Hundred Years of District Nursing, London, 1960.

スは、貧民層の患者に対する奉仕の精神を帯びた看護専門職者として高い水準の看護ケアを提供し、その傍らで教育・教化を行い生活の向上改善を促すという責務を負って全国に広がっていったのである。すなわち、彼女たちは、クレイヴンの、もといナイティンゲールの理想を体現する存在であったのである。

と云える育ちのよい中流階級出身の女性に従事することは珍しくなかった。たとえば、一九一七年刊行のB・N・ヘッダーマンによる手記『アラン島での生活について―アイルランド沖合の離島でのデイストリクト・ナースの経験―』は、タイトルどおり僻地での巡回訪問看護の過酷さを描きだしたものであるが、「育ちのよい女性」が周囲から反対されながらも、QIの理念に呼応してクイーンズ・ナースに志願した心情を語っている。

また、二〇世紀初頭、社会評論を次々に発表して評判を得たM・ローンも、理念に呼応した一人である。彼女は当時、素性を詳らかにしないまま（おそらく立場上控えたものと思われる）、一九〇〇年代初頭に『女王陛下下の貧民たち』を皮切りに、『イギリス人の城』『彼らの視点から』などの六編の著作を発表しているのだが、それは、クイーンズ・ナースとして実際に出会った患者や家族についての見聞をもとに、社会に向けてある種の問題告発、提言を為すためのものであった。

これらの著作は当時の貧民層の生活実態を描き出したものとして当時評判を呼び、また、今も社会史研究の重要な史料としても名高い。それゆえ、彼女についての調査研究もおこなわれ、現在ではマーサ・ジェイン・ローンが

該当することが明らかになっている。マーサは、一八五二年に海軍将校の長女として生まれ、父のリタイア後の一八八六年、三四歳のとき、看護師を目指してチャリング・クロス病院で訓練に入り、病棟看護師や看護師長としての経験を積んだ後、一八九三年九月、QIのデストリクト・ナース養成課程に入所している。翌年クイーンズ・ナースとして登録されて、まずダービーシアのバクストンでの巡回訪問看護に従事した後、一八九七年からはポーツマス地区看護協会の監督（査察員）を務め、一九〇五年に健康問題で辞職するまでの間、看護協会の運営や当地でのデストリクト・ナースの養成に手腕を発揮し高い評価を得たという女性である。

彼女の著作からは、教化・教育による影響の行使、すなわちデストリクト・ナースの果たす教導の重要性が強く意識されていたこと、それゆえに著作を発表することでその思いを世に発信したことがうかがえる。こうした彼女の経歴やその認識は、ナイティンゲールやクレイヴンが理想とした「良い出自と教養に高い使命感をもった」クイーンズ・ナースのそれと言ってよいものである。

このように使命感に燃えて全国に赴任していったクイーンズ・ナースではあるが、皆が皆大活躍し達成感を得られたかという点、実はそうでもなかったろう。地方への赴任であれば、たった一人、見知らぬ地での過酷な環境下

の看護活動となったのである。雇用契約を結んだ地区看護協会を主宰するヴォランティア女性の協力はあったとはいえ、孤独感や疎外感にさいなまれることが多かったようで、『クイーンズ・ナースズ・マガジン』誌への投稿にも、先に挙げたヘッダーマンの手記にも、そうした心情が吐露されている。実績を挙げたローンも、この点について著作のなかで言及しているほどである。

加えて、地方、とりわけ郡部においては、訪問症例が少なく、かつ助産活動が中心になるという実態があった。こうした状況に対して、不満、疑問を感じるナースがいたことが『クイーンズ・ナースズ・マガジン』誌の投稿からうかがえる。高い使命感と看護専門職者として自負があるだけに、ある種の焦燥感につながっていたと言えよう。その一方、大都市部での勤務は、ホームに寄宿しての組織活動になるが、激務の連続となり、ローン自身がそうであったように、体力、精神をすり減らして健康を害して退職するという事例も多かったのである。まさに、前回紹介したクレイヴンによる『手引き』書で挙げられていた「貧民に対する真の愛情と、彼らが置かれている悲惨な状況を和らげたいと心から思う気持ち」がなければ動まらない仕事で

あったのである。そして、だからこそ、職業を持つことによる経済的自立ばかりでなく社会的貢献による自己価値の確認を求めたいと願う中流階級女性、

言い換えればフェミニスト的心情に共感する一定数の女性にアピールする存在であったのである。

また、先に指摘した地方郡部における訪問看護の件数の少なさと症例の偏りなどは、実際問題として巡回訪問看護体制の全国区展開にとっても課題となっていた。たとえば、クイーンズ・ナースを派遣する条件として加盟する地区看護協会に対してQIが求めている一律の基準（報酬や待遇など）は、都市の看護協会ではクリアできても、人口が少なくそれゆえに寄付や会費に基づく財政基盤が脆弱となる郡部では対応することは難しく、看護協会の設立を妨げていたからである。そ

こで、一八九七年には州単位での看護協会の加盟を可能とし、この州協会の傘下に郡部の地区協会を置くということたちの加盟を促す体制を整えることとなった。これにより、州協会傘下の郡部看護協会の活動は、州協会に赴任したクイーンズ・ナースの監督・支援を受けられることとなり、同時に、QI登録のクイーンズ・ナースではなく、その財政力や需要に応じた看護助産師 Village Nurse Midwife（助産師の資格に加えて州協会が独自に設けた看護師養成課程を修めたデストリクト・ナース）を雇用することで活動を維持することが可能となったのである。また、地方の保健衛生当局と連携して各看護協会のナースたちが保健活動をすることも可能となり、これにより各地の地区看護協会が公的な財政支援を受ける基盤が整えられていった。

こうした体制変更は巡回訪問看護において二種類のランクの看護師の併存を容認するものとなったが、これにより一九世紀末以降、郡部、農村部にまでQIの管轄下にある巡回訪問看護の拡大が進んだことは確かである。実際、一九〇二年、加盟地区協会は三四八、州協会は九であったのが、一九一五年には、地区協会六二七、州協会二七七というように着実な拡大が確認されるのである。その後、看護師登録制度の発

足によって徐々にすべての巡回訪問看護従事ナースも正規登録ナースとなっていくが、クイーンズ・ナースとともに州看護協会が養成し傘下に置くデストリクト・ナースが活動することは、当該地域に親しみと理解があり、ゆえに疎外感や孤立感をあまり持たずに済むナースが存在することでもあった。生まれ故郷であるウェールズ辺境の地区看護協会で第一次大戦直後から一九六〇年代まで活動をつづけ、その評伝が残るハンナ・ミルズ・エヴァンズの事例などはまさにその例に当たる。こうしたデストリクト・ナースの活躍によって郡部での活動は支えられたのである。

こうして一九世紀末以降、QIの統括の下、各地に地区看護協会が設立されていき、巡回訪問看護制度の全国展開が進んだ。それは地域の巡回訪問看護体制の定着のみならず、保健衛生の増進、プライマリ・ケア体制の形成などにつながっていった。それは言うまでもなく、クイーンズ・ナースが各地に赴任し奮闘したからであり、そして、それに影響を受けて各地で誕生し、同じく奮闘活躍したデストリクト・ナースたちがいたからである。そう、彼女たちこそが、その働きにおいてレジェンドというべき存在であったのである。



1905年ころのリバプールの地区看護協会（Liverpool Queen Victoria District Nursing Association）のクイーンズ・ナースの活動の様子。患者は協会が提供した車椅子に乗っている。労働者住宅前の街路での撮影。
出典：Susan Cohen, The District Nurse, Oxford, 2012.

近代日本音楽史を 彩る女性たち

6 歌人ピアニスト 橋 糸重 (その1)

佐野 仁美

本学発達教育学部
児童教育学科教授

文学ともゆかりの深い初期のピアニストをもう一人あげておこう。橋糸重（一八七三—一九三九「明治六—昭和一四」年）は、亀山藩御典医良珉と亀山藩の士族出身の母さち子の三女として、亀山市に生まれた。その年に、五人の子どもを残して父が亡くなり、翌年、母とともに東京に出た。おそらく大学東校（東大医学部の前身）で勉学中であった兄を頼ったのであろうが、兄は一八八三年に、若くして任地仙台にて没してしまう。糸重は、東京師範学校附属小学校を卒業し、母親に連れられて、東京に出てきた歌人の佐佐木弘綱に国語学や和歌を学び、後に子息の信綱に師事する。その傍ら、英語やドイツ語も

修めた。三重で両親が習っていた佐佐木弘綱の二代続いての門人であり、後に、短歌結社・竹柏会の中心メンバーの一人となる。

糸重は、音楽取調掛が東京音楽学校となった翌年の一八八八（明治二二）年に入学して、ピアノを専攻した。芸術や語学への関心とともに、幼い頃から箏を習っていたことが、動機の一つであったと推察される。東京音楽学校には、音楽家としてのキャリアを持つオーストリア人のディトリッヒが着任し、同校が少しずつ本格的な芸術教育機関へとシフトしていった時期である。一八八九年には、幸田延が六年間の留学に旅立った。糸重は、在学中より、東京音楽学校を中心とする演奏会に連弾や独奏でたびたび出演していた。たとえば、一八九一年一月の同好会慈善音楽会の《ソナタ》（作曲者名不明）の演奏について、『音楽雑誌』第一四号（一八九一年一月）の「同好會音樂會の批評」では、「橋絲重子の洋琴（ソナタ）は御熟練の程感服の至り也」と書かれている。

一八九二明治二五年に本科専修部を首席で卒業した糸重は、選ばれて研究生、授業補助として音楽学校に残り、一八九六年に助教を経て、一九〇一年には教授に任ぜられる。竹柏会の歌

人、小花清泉は「明治三十年前後の音樂會では、幸田女史のヴァイオリンと相並んで、橋女史のピアノが演奏の花形だった。『中略』學生服の上田敏君や島崎藤村氏の青年姿などが見られた」と語っている。経費節減のため、一八九三年に、東京音楽学校は高等師範学校附属となる。西洋化に対する反動的な世相の中、音楽界は、一時的に停滞の時期を迎えたのである。糸重は、一八九三年一二月の学友会演奏会でフンメルの《変ホ長調ソナタ》を独奏している。

音楽会そのものが珍しかった頃、それは西洋文化に憧れる青年たちが集う催しでもあった。糸重の演奏は、どのよう受け取られたのであろうか。東京音楽学校の卒業式は、卒業生や関係者の演奏発表の場でもあった。上田敏は、『文学界』第三二号（一八九五年七月）に掲載された「西樂月旦」の中で、同年七月の卒業式の「當日の白眉」として、糸重のベートーヴェンの独奏を挙げ、「感籠り情豊かに器械的彈法の域を脱出したるは同嬢の特色にして、先にフンメルが變ホ調ソナタの獨奏に喝采を博してより茲に三年を経て、其妙技を示されたり」と述べている。敏は、以前にも糸重のフンメルソナタの演奏に言及していて、強い印象を持ったようであるが、ここでは「感情豊かな演奏」と

とらえていることに注目しておこう。ディトリッヒの帰国後、糸重は幸田幸（延の妹、ヴァイオリニスト）と並び、音楽学校のホープとして注目されていたのである。

ところで、糸重との交わりで知られるのが、島崎藤村である。明治学院で、キリスト教を通して西洋音楽に触れた藤村は、明治女学校、その後仙台の東北学院の教師を約一年勤めて東京に戻り、一八九八（明治三二）年四月から一年間、設置されたばかりの東京音楽学校の専科で、糸重にピアノを習った。専科とは、ピアノ、ヴァイオリン、唱歌のうち一―三科を選んで修めるコースである。同年四月の

けが女性によって伝えられているという友人の言葉を紹介している。ここからは、音楽を他の文化と相対化して眺めている藤村の姿がうかがえる。

藤村の小説、『水彩画家』（一九〇四年）に登場する柳澤清乃は、『家』（一九一一年）における曾根千代とともに、糸重をモデルにして描かれた女性である。『水彩画家』では、留学帰りのヴァイオリニスト清乃が、二人の婦人伝道師と軽井沢に避暑に来て、船旅で一緒になった画家で、主人公の鷹野伝吉を訪ねてくる場面が描かれる。糸重は留学こそしていないが、避暑に行った軽井沢から小諸に足を伸ばして、小諸義塾の教師として赴任していた藤村と会っている。そして糸重は、『このころの華』第三巻第一〇号（一九〇一年一月）に掲載された「那木の下枝（其二）軽井沢日記のうち小諸の半日」の中で、「見給へこれは此あたりにて鐵道艸といふなりと、我らをあないせらる、藤村の君ゆびさし給ふ」と、面白い名前の草について説明する藤村や、千曲川の様子を描いている。藤村の小説では、上田出身の純朴な妻お初と対比して描かれる芸術家清乃について、伝吉は、「なかく確乎とした、高尚な思想のある、男らしい女で、反って此方が恥かしいと思ふ位なんです。彼人が私の事業に對

しては、奈何に同情を表して、慰めたり、勵したりして呉れたか『中略』眞個に私を知つて、私の繪を觀て呉れる人は―彼女です」と述べ、清乃に「貴方も孤獨なら、私も孤獨だ」と語りかける。

外面的な成功とは裏腹に、糸重は両親や兄といった身近な人々を亡くし、次姉の家族と一緒に住んでいた。藤村は糸重に、華やかな音楽家ではなく、孤独な魂を持ち、西洋音楽に立ち向かっていく姿を見出して、共鳴し、勇気づけられたのだらう。新しい文学を志していた藤村にとって、短い期間であったが、糸重は心を通わせることができた人物ではなかったかと思われる。対して、糸重は上記の文章で、「いかで今日ひと日とゞまりて、布引の觀音を」とゞめられぬれど、さほる事あれば輕井澤に歸りぬ」と書いているのみである。（以下次号）

主要参考文献：

秋山竜英編著『日本の洋楽百年史』第一法規出版、一九六六年
上田敏「上田敏全集 第八卷」改造社、一九三〇年
『このころの華』第三巻第一〇号、第四三巻第一〇号、（一九〇〇年一月、一九三九年一月）
島崎藤村『藤村全集 第二卷』筑摩書房、一九六六年
東京藝術大学百年史編集委員会編『東京藝術大学百年史 演奏会篇』第一卷、音楽之友社、一九九〇年



島崎藤村(小諸時代)旧宅 (筆者撮影)

同声会春期演奏会を聞いた藤村は、五月二日の『読売新聞』に掲載された「土曜日の音楽」の中で、翻訳しなければ伝わらない詩歌や小説と比べて、音楽は直に聴衆の心に伝わると述べ、男子により伝えられた西洋文学、絵画や宗教などに対し、音楽だ

物語の女性 6

『とりかへばや物語』の女君

野村 倫子 本学文学部日本語日本文学教授

「とりかへばや」とは「取り替えたものだ」という意味で、二人の子供が身体的な性とは異なった性情で成長したことを嘆く父の言葉から採られた物語名であった。男女の性が入れ替わったような「きょうだい」に、女君と結婚させられた四の君（右大臣の娘で従姉妹にあたる）や好色な宰相中将を交えた四人を中心に、物語は展開する。現在読まれている『とりかへばや物語』は改作された「今とりかへばや」とも言うもので、「古とりかへばや」は「女中納言のありさま」と憎きに『無名草子』一〇二〇年ごろに成立した、藤原定家の姪である俊成卿女が作者に擬された物語評論集と評されるように女主人公の書きぶりが不評で、読者に受け入れられるように改変されたようである。近年クローズアップされるようになった性認識の揺らぎを扱い、結局は当時の通念的な性

差意識に回収されているが、女性東宮の登場や、男装の女君に男性が迫る場面があり、二十世紀後半に至ってもなお「変態的」だと酷評されていた。主人公の女君は物語の前半で男性官人として出世するが、本稿では「女君」で統一し、兄弟は女官の時代も含めて「男君」と呼ぶことにする。

権大納言（で兼大将）には、二人の妻があり、源宰相の娘との間に男君を、藤中納言の娘との間に姫君を、それぞれもうけていた。二人の子供たちはそっくりの顔立ちであったが、若君は優美、姫君は闊達と正反対の性質で、成長すると、若君は御帳台に籠って絵、雛遊び（現代の人形遊び）や貝覆い（現代の貝合せ）を好み、姫君は戸外で鞠や小弓に興じ、漢詩の作詠、琴や笛の演奏に才能を発揮した。そのため、世間では二人の存在を逆に認識し、家中でも若君を「姫君」、姫君を「若君」

と呼ぶようになっていた。性格の違いが異性装へと発展し、「遊び」の選択、さらに人生へと、当時の男女間の強固なジェンダーがきょうだいの生活に影響をおとしてゆく。

女君は元服すると出仕し、帝からは女一の宮の婚にと望まれるが、父方の伯父右大臣から娘（四の君）との縁談を持ち込まれて形ばかりの夫婦生活を送る羽目になる。一方、男君は裳着の後、尚侍（女官、内侍司の長官）となつて、皇嗣不在のために立太子した女一の宮（女東宮）に仕え、東宮と書、絵画、琴に興じるうちに、内気だった性格も次第に開放的になる。

女君の「妹の姫君」に興味を示した宰相中将であったが、女君の妻である四の君と密通し懐妊させたばかりか、さらに異性装を見破つて女君まで懐妊させる。その結果、女君は男性官人としての生活に終止符を打つ決意をし、

宰相中将の宇治の別荘に身を隠す。

女装を解いた男君は女君の行方を求めて都を出立、無事に再会すると、女君は母であることよりも宰相中将との縁を絶つことを選び、子供を宇治に残して単身帰京した。

男君は参内して本官（中将）に復すが、きょうだいの入れ替わりに気付かない四の君は当惑を隠しきれず、権中納言（もとの宰相中将）も顛末が呑み込めずに右往左往する。女君は尚侍として女東宮に近侍するが、東宮は男君との子どもを懐妊しており、秘密裏に生まれた子供は左大臣（きょうだいの父、もとの権大納言）家に託される。帝の目にとまった女君は皇子を出産して中宮となり、権中納言、四の君ともども無事関係が収まった。

時移り、女君の産んだ若宮が立太子、女東宮は即位を経ずに女院となつて男君の後見を受けることになる。女院が密かに生んだ若君は童殿上し、女君が宇治に残した若君も大納言（もとの権中納言）の子として童殿上するが、女君はついに真相を語らない。さらに東宮が即位し、女君は国母に、その後生

まれた二の宮は東宮になり、男君も関白となつて大団円で幕が下りる。

『源氏物語』の影響を受けた場面が多々あるものの、「もののあはれ」的な美質はほとんどない。父を悩ませた「とりかへばや」は、きょうだいが生まれながらの性（身体的ではあるが）に復すことで、家を嗣ぐ男子と、皇室に入つて皇子（次代の天皇）を産む女子を得たことで当時の社会制度の理想を実現してめでたく物語を閉じている。女東宮も女君の産んだ皇子が東宮に立つたために即位せず、（鳥羽天皇の皇女八条院の史実によるものか）女院になることで収まりをつけている。「きょうだい」は前半生を異性装で社会を生きたが、ともに同性愛には至らず、その役割は男装の女君に迫つた宰相中将が担っていた。ただし、『無名草子』は「古とりかへばや」に対してであるが、宰相中将の同性愛的行為は不問にし、女君の男装のままで女性性（出産や月の障り）を非難している。「とりかへばや」とはいえ身体的なりスクを負うのは常に女君（四の君）も女東宮も望まない懐妊を強いられた

点では共通）であり、男君と決して対等ではない。男君が異性装で内向的な日常生活を過ごしつつも女東宮に対しては男性として振る舞つた点からも、等価でない（むしろ女性に負性を強いっている）ことが見てとれる。また、望まない懐妊の結果、四の君は一時的とはいえ親から勘当されて行き場を失い、また、女君や女院が自分の子どもに対して母と名乗れないという新たな問題も立ち上がってくる。四の君も宰相中将との子どもの存在に負い目を抱えていて、そこから決して男女等価の「とりかへばや」ではない、当時の男系社会における女性の社会的立場の弱さが伺えるところである。

二十世紀末になつて「男らしさ」「女らしさ」に縛られない点がようやく評価されつつある『とりかへばや物語』であるが、女装で大人しい男君よりも男装で官人としてのびのび活躍した女君の前半生に注目が集まるのは、当時の社会制度に回収されなかった由であるうし、また現在なお男系重視が残っていることへの女性たちの批判的視線のなせるわざでもあるう。

日本の伝統技術を守る

女性の進出 4

村上裕道

本学文学部歴史遺産学科教授

本稿では、前号に続き、京都府教育委員会において文化財建造物保存修理の設計監理に携わる女性職員にインタビューを行った。

文化財建造物修理技師へのヒアリング

前号において、国宝・重要文化財建造物の保存修理に係る設計監理については国が一元管理をし、それらの過半が所在する近畿府県では、滋賀県・京都府・奈良県・和歌山県の四府県が直接技術者を雇用していること、また、京都府では、既に、女性（保存技術）職員数が全二〇人の内七人を占めるなど、かなり女性の進出が進んでいることを述べた。

また、前回のインタビューでは、最もキャリアの長い女性職員にお話を伺ったが、今回は、最近主任技術者となつて、重要文化財「聴竹居」保存修理工事の現場管理の責任者を担当している稲田朋代さんにお話を伺った。

文化財建造物修理の印象

稲田さんの学生の頃についてお聞きすると、都市計画系のゼミに所属していたとのこと、文化財とは全く異なる分野にいた。特に、設計が好きで、その頃は将来建築設計事務所に行こうと思い、夜遅くまで図面を描いていたそう。建築設計を一生の仕事としたかと思つていたらいい。

その頃は、文化財建造物を見にも行ったことがなかったし、過去のものには興味もなかったらしい。どんなところか想像もしなかったという。建築都市計画系の学生らしい、現在から未来を語り創造していたようだ。

その後、京都府の建築技師職を受験し、一九九七年に採用され、知事部局に配属された。採用当初、建築確認申請に関する業務を担当していたが、警察本部へ転勤し、交番等の木造建築の設計に携わるようになったとのことである。

ここで初めて木造建築に出くわしたらしい。大学の建築学科では、好きな設計もRCや鉄骨等の建物の設計が主で、木造建築は習っていない。そのため、木造建築の納め（木と木の継手、仕口の詳細）がわからず、勉強したいと思つたらしい。そこで、働きながら、京都建築専門学校で夜間に伝統木造建築を習っている。一週間に三日のペースで一年間通っており、かなりハードであつたようだ。当時の教材等をノートにきちんとまとめており、見せていただいた。私が文化財の修理設計監理を行っていた頃、教えられた内容とはほとんど同じであつた。くわしく聞くと、大先輩である京都府の元文化財保存修理技術者の方々に教わっていたことが分かった。さすがに、京都を中心とした伝統建築を本格的に習うと、のめり込むとともに、その奥深さも感じる場所となり、ますます興味関心を持ったらしい。

なお、京都府では、教育委員会の文化財保護課の建造物部門には、知事部局の建築部門から職員が派遣されている。知事部局で、伝統木造建築を勉強している人はとてもめずらしいので、当該職員の交代期に稲田さんに声がかかり二〇〇四年に転属したとのことである。

ある。その時の感想は、「府庁にそんな楽しいことができる場所があるんや」と喜んだらしい。

教育委員会では、庁内の勤務からスタートしている。その後、二〇〇九年に萬福寺庫裏の解体修理工事に携わり、二〇一三年に知恩院本堂の半解体修理、そして、二〇一六年に再び本庁に戻り、文化財建造物の防災事業・美装化事業を担当した。

現在の聴竹居（大山崎町）には、二〇二〇年二月に着任、主任技術者として、最初の工事である。工事は茶席の全解体修理、本屋・閑室の部分修理を実施している。聴竹居は、日本のモダニズム建築を代表する建物で、昭和初期の建設である。現代の建物である



稲田朋代さん 重要文化財聴竹居（大山崎町）にて

ように見えて現代ではなく、伝統家屋とはまた異なる。さらに、藤井厚二（二八八八―一九三八、近代住宅へ日本の気候風土・生活に西洋的な空間構成を融合させた建築家、建築学者）が京都大学での環境工学の研究成果を試しており、修理の難しい建物である。しかし、稲田さんは、臆することなく取り組んでおり、むしろ「のびのびと調査させてもらって満足」と表現された。その姿勢は頼もしく見えた。

女性進出の課題

最後に自身のキャリアを振り返って、この分野における女性の進出についての感想を伺った。特に、稲田さんは二児の母でもあることから、自身の経験を踏まえて、子どもの事などを中心にお聞きした。

職場の処遇について、男女差は、まったく感じないとのこと、これまで聞いた職員と同じ反応であつた。さらに、産休時のことについても、それに伴うハンディは見られなかったとのことである。

次に、子どもについてであるが、長子は、教育委員会へ来て二年後、そして、次子は、その二年後に出産している。そして、育休も一才になるまで取れたとのことであつた。出産の時期に

については、現場勤務中は、交替要員がいなかったためやはり難しいと思うとのことであつた。

育児と仕事の両立について聞くと、親世代が近くに住んでおり、今も良く預けているとのこと、近くに見ても預ける人がいるので続けられると述べられた。周りの方々の協力があればこそ、現在の状況が保たれていると謙遜されたのであろう。しかし、現場仕事は、交代要員もないことから突発的な対応は難しいので、共働き夫婦のみでは限りのあることも事実である。

続いて、後輩の女性方の状況についてお聞きしたところ、自身の時は幸いなことに育休をきつちりととれることができたが、後輩の中には、仕事の状況から短期間になった人がいるとのことであつた。詳しく聞くと周囲の理解はあるが、職場規模の問題が基本にありそうだった。「その2」で見たように、（公財）文化財建造物保存技術協会のような全国組織では、勤務地の移動範囲が大きく、出産を考える人にはハードルが高く見えた。一方、府県規模では少人数のため融通が難しそうである。広域的な組織と地域内の仕事の組み合わせをライフサイクルに合わせで行える組織を考える必要があるであろう。

女性とスポーツ―多くのハードルを越えて―

□野 隆史

本学発達教育学部児童教育学科教授

本稿では女性とスポーツを巡る歴史に触れ、さらにそのスポーツの課題を探る。

女性とスポーツの歴史

近代五輪において、女性選手が登場するのは一九〇〇年の第二回パリ大会で、二二〇名余りの選手中一九名の参加が最初である。その後もしばらく五輪での女性の参加はわずかである。スポーツは「人間社会にしか存在しえない高度に文化的な営み」¹⁾であるとすれば、その「文化的営み」は男女を問わず触れる機会があるべきであろう。

なぜ女性はスポーツに触れる機会が少なかったのか。一八世紀後半から近代の産業社会を押し進めたのは、欧米の中産階級以上の白人男性であった。その社会のエリートとして彼らには、健康な身体と精神力が求められ、その教育のためにスポーツが重視された。「スポーツの中で大切にされる価値や求められる人間像は、エリート男性のためだけに必要であると考えられ、ひいてはスポーツが男性のための身体文化だと解釈される傾向をもたらしした。さらには、スポーツの中の女性的な価値が軽んじられたり、スポーツをする女性を「二義的に考えたりする傾向が生み出されていった」²⁾とされる。

そのような中でも少数だがスポーツに触れ、それを楽しみ始めた女性たちもいた。二〇世紀初めには「国際女子スポーツ連盟」が設立され、IOC（国際オリンピック委員会）等との話し合いも持たれた。しかし、その後も女性の五輪参加は少なく、女性と

スポーツの距離はなかなか縮まらない。「何よりも女性たちにとって問題だとされたのは、男性たちの手で運営されているスポーツ組織の意向によって、自分たちが望むようにスポーツをする権利が得られないことであつた」³⁾とされるように、スポーツに関する決定権は男性にあった。

その後一九五〇年代、「オリンピック・ムーブメントの対象は全ての人々であり、決して男性だけではない」という見解も出され、一九六〇年代欧米では生涯スポーツを普及する政策もみられるようになり、女性たちがスポーツを積極的に行うようになる。さらに一九八四年のロサンゼルス大会では、スポーツ界の女性への不平等が唱えられ、女性の参加拡大が図られた。女性の五輪初参加から一〇〇年、二〇〇〇年以降トップレベルの女性の競技参加の状況はかなり改善された。しかし、先述のようにスポーツに関わる意思決定機関への女性の登用の問題は世界でも、さらに日本でも遅れている。

このような現状について小笠原は、日本の女性のスポーツの強化・振興には、選手を取り巻くスポーツ組織を変えなければならぬ、それには女性のリーダーシップの開発が重要であるとし「男性の視点でしか見てこれなかったスポーツ文化を女性という視点で見直し、男性も女性も最大限にスポーツに関われるようなスポーツ文化にすること」⁴⁾が重要であるとしている。

「男女別」で行われるオリンピック

前述のように、女性とスポーツとの距離は少しずつ縮まってい

る。しかし男女に分かれて行われるオリンピック等では、また別の課題もある。小坂は、女性選手には男性選手にはない別の「まなざし」⁵⁾があるとし、競技で新記録が出た時、「当該のアスリートには『賞賛のまなざし』と『ドーピングでは?』という『疑惑のまなざし』が向けられる。女性アスリートには、この二つのまなざしだけでなく、『男性では?』という『性別へのまなざし』⁶⁾が加わる」⁵⁾と述べている。

この事では二〇〇九年世界陸上の女子八〇〇mで、驚異的な記録で優勝した南アフリカのキヤスター・セメンヤ選手が話題となった。レース後、セメンヤ選手にはその筋肉質の体等から性別を疑う報道がなされ調査されることとなる。IAAF（国際陸上競技連盟）は、同選手にはドーピング違反はないが、自然な状態でテストステロン（男性ホルモンの一種）が通常の女性より高いことを発表した。その後、二〇一五年には女子選手の血液中のテストステロンのレベルに上限を設けるルールが採用され、この上限を超えるセメンヤ選手は出場資格を制限される。そしてこのテストステロンの値が高い女性選手は、それを下げなければ出場種目が制限されることとなった。

スポーツにおいては平等に競い合うことが大切である。そのために自分の体に細工等をするドーピングが禁止されてきた。しかし、この意図的にテストステロンを下げるという行為はドーピングにはあたらないのであろうか。

この問題の詳述には誌面の余裕がないが、女性と男性の境界は現代においてもさまざまな観点が、また科学的知見も不足し、公正な判断は模索中である。またセメンヤ選手の問題については「選手自身の尊厳とプライバシーの権利を含む、人間としての根本的な権利が侵された」ことも大きく重要な問題である。現代社会がそのような状況にある中、スポーツという世界は「女性」「男性」の二つの枠組をかたくなに守ろうとしている。

小坂は、男性中心に作られてきた近代スポーツは「女」か「男」

かという二分法をベースに競技のルールや文化が形成されてきた」としている。そして今後のスポーツについて「これまで当たり前だと思っていた『女性』『男性』のカテゴリーがなくなってしまうだろう」⁷⁾と選手やその観客、またスポーツに親しむ人々に、新たなスポーツの視点の必要性を訴えている。

「女と男」という枠を超えて

二〇二二年の東京五輪では、IOCの「男女平等」の理念から「男女混合種目」⁸⁾がさらに増えた。制野はこれを「面白い方向」とし「男女の平等や機会均等という意味もあるが、むしろスポーツがその出自で本来持ち合わせていた『不合理の容認・許容』を軸とする『祝祭性（＝カーニバル性）』復活に対する微かな予感があるからであり、厳密性や平等性を柱とする近代スポーツにはほんの少しジャブを打ち込むのではないか」としている。「男女混合」によりすべてが解決する訳ではないが、これまで男性が男性のために厳密性を重視し作ってきた近代スポーツに、新しい方向を示すように思われる。

【引用・参考】

- 1) 来田享子「ハ特集」社会における女性を映し出す鏡としてのオリンピック・パラリンピック」『体育・スポーツ経営学研究』第30巻、二〇一七年、20頁
- 2) 来田享子「女性スポーツの誕生と展開」『体育科教育』第59巻第12号、二〇一一年、10頁
- 3) 2)の前掲書12頁
- 4) 小笠原悦子「スポーツ組織に女性の積極的な進出を」『体育科教育』第59巻第12号、二〇一一年、21頁
- 5) 小坂美保「スポーツにおける『性別問題』―『女性』アスリートに向けられるまなざし」『女性学評論』第32号、二〇一八年、55頁
- 6) 5)の前掲書66頁
- 7) 5)の前掲書71頁
- 8) 制野俊弘「男女混合種目」に見るスポーツ観の変容―スポーツにおける「カーニバル」考―」『たのしい体育・スポーツ』二〇二〇年春号」第39巻第2号、二〇二〇年、53頁

ミネルヴァ日本評伝選 『日野富子』

田端泰子 著 ミネルヴァ書房、2021 年 7 月刊

本書は、長年本学に在職し、日本女性史研究をリードしてきた著者が、その対象とした人物の一人である日野富子についての研究をわかりやすくまとめたものである。最初に本書の構成を挙げておこう。

- 第一章 公家日野家の歴史
- 第二章 富子、義政に嫁ぐ
- 第三章 義尚を後見する富子
- 第四章 義尚の自立
- 第五章 後継将軍を選ぶ
- 終章 晩年の富子とその死

日野富子に関係する著者の近年の著作には『足利義政と日野富子』（山川出版社 日本史リブレット人 2011）・『室町将軍の御台所 一日野康子・重子・富子』（吉川弘文館 2018）がある。章構成からもうかがわれるように、日野家と室町将軍家との関係の前史として踏まえながら、義政との結婚後の富子の生涯を著述した本書は、前の二つの著作を富子で主人公にあらためて統合したものとも位置付けられるだろう。

日本評伝選シリーズでは、書名の傍に、当該人物の人生や個性と密接に関わると著者が判断する史料の一節を付しているが、本書にも「政道の

事、輔佐の力を合をこなひ給はん事」と、一条兼良が將軍義尚に進呈した『樵談治要』の一節を掲出する。男であろうが女であろうが、道理を心得た人物が政治を補佐するのは当然であるとの考えを述べた一節であるが、この一文を選んだところに、富子に対する著者の評価が端的にあらわれていると言えるだろう。

著者は女性史研究者としても知られるが、一方では在地領主制やその村落支配の在り方を研究する中世史研究者でもある。幕府内における富子の動向を追うだけにとどまらず、將軍家と天皇家・公家・寺社らとの関係や、山城国の国人あるいは山科七郷惣郷の農民などの動向が折に触れて語られるのは、富子の行動や判断を畿内社会全体との関連の下で理解しようとする著者の姿勢にほかならない。応仁・文明の大乱をはさむ特定の時代に生きた日野富子という女性を、立体的に把握し、解説しようとする著作である。



LIME 通信

今夏、1年越しに開幕した東京オリンピックでは、アスリートの美しく輝かしい瞬間に感涙し、コロナ禍に一筋の光を見出した人も多かったのではないだろうか。海外にルーツをもつテニスプレーヤー大坂なおみが最終聖火ランナーをつとめたことは、「多様性と調和」をコンセプトとした大会をまさに象徴するものでした。

しかし、多様性尊重という面では、大会開催までは紆余曲折があり、苦難の連続でした。女性蔑視発言による大会組織委員会前会長の辞任騒動後、負のイメージ払拭のため白羽の矢が立った橋本聖子氏もその一例です。結果、組織委員会の女性理事の登用比率を4割とするなど、ジェンダー問題にも切り込むこととなりました。

いまや、女性やLGBTQ、人種の・民族的マイノリティー、障がい者といった多様性への配慮が世界的潮流であり、文化面でも、2025年からのアカデミー作品賞では新たにこうした多様性の項目が選考基準として適用されることが発表されています。また身近な学校現場に目を向けると、性別に関係なく制服を選ぶ制度を導入する学校が増えるなど、多様性への配慮が見て取れます。

こうした動きにより、私たちにも意識の変革が求められています。女子はスカート、男子はズボンが当たり前というように、暗黙の了解や古いルールにとらわれてはいないでしょうか。おかしいと感じたら声を上げる、時宜にかなって自らを変化させる、より柔軟な感性を持ちたいものです。

CHRONOS(クロノス) vol.45

発行日: 2021 年 10 月

発行: 京都橘大学 女性歴史文化研究所
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149
E-mail: iwhe@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
女性歴史文化研究所